NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY ｜ BOOK II — PUDU ALPHA

第 7 章

所有されない男の条件

THE TERMS OF AN UNOWNED MAN

川の下を通る通路は、もはや川に属さなくなった水を検査するために造られていた。

ナディラが壁に掌を当てると、コンクリートの奥で真鍮の板が動き、歯を削り落とされた車輪が現れた。彼女は公共設備向けにはとうに製造されなくなった工具を使い、それを半回転させた。通路は段階を踏んで沈黙した。まず頭上の川。次いで護岸に埋められたモーター。そして市の配水網から聞こえる、かすかな案内音声。機械式の水門が、古い貯水池から浅い水流を招き入れた。プドゥ・アルファでは誰もその水を合法的に所有できない。そもそもその水が存在したことを証明できる者もいなかった。

ロイはブーツのまわりに水位が上がるのを見た。三機の追跡機が水路を横断したのは二十七秒前だ。視界から消えたことは、彼の追跡をやめたことを意味しない。一機は高度を維持し、もう一機は最も可能性の高い出口を再点検する。三機目は、逃亡者と一つの問いの違いを見分けることを学ばなかったモデルが選んだ地点で待つだろう。

「古い水路に詳しいんだな」と彼は言った。

「違う」とナディラ。「それを撤去させまいとする人間を知っているだけ」

彼女は手動接点で小さな灯りをつけた。黄色い光が浮かび上がらせたのは、錆びた検査印、古いマレー語の告知、そして新しい禁止表示の上から縦に書かれたアラビア文字だった。文字は慈善水利信託の名を示している。禁止表示は、その信託を失効した管轄権だと宣言していた。二つの文言のあいだには、二人が歩けるだけの余地があった。

「どこへ向かう？」

「事務所ではない事務所。あなたの裕福な友人から返事が来た」

「そんなことは分からないだろう」

「回収機械を寄越さなかった。この地区では、それが返事になるのよ」

ロイは言い返さなかった。内部の出力予備量は、短時間なら再び激しい動きを許す水準まで回復していた。しかし、その下で循環する銀色の媒体はまったく戻っていない。もはや表示に頼らずとも二つを区別できた。出力は潮汐であり、もう一方は海岸線だった。一度使うたび、残されたものの輪郭そのものが変わる。

二人は「PUDU ALPHA / CONTRACT TRANSPORT 4」と刻まれた廃駅のホームへ出た。公式ネットワーク上に路線は存在しない。それでも小さな人だかりが待っていた。人間の運び屋たち、明らかに再整備された労働用ヒューマノイド二体、断熱された人工胸郭に生きた子を抱く女。誰も、この駅で許される礼儀の時間を超えてロイを見つめなかった。

ホームの端には、ガラス容器で飲料水を売る売店があった。印刷成形された義手の少年が、ナディラに領収書を求めた。彼女は旧式の金属トークンを差し出した。少年は親指の爪ほどの幅に折った紙片を返した。

三つの条件。一人の証人。鏡はなし。

その下には政府の時計ではなく、潮門の開閉で定められた時刻が書かれていた。

「鏡とは何だ」とロイ。

「公衆中継も、記録領域も、あなたの声の模倣も禁止ということ。ようやく誰かが、証人は複製ではないと思い出したのよ」

少年は陶器の器から水を注いだ。背後の汚れた壁では企業広告が光っていた。安全になった雨水。一滴残らず追跡可能。微笑む女性経営者の姿は、左右対称と清潔な表面だけで構成された、信頼という抽象に編集されていた。ロイは一瞥して歩き続けた。ナディラはその視線に気づいたが、何を見たのかとは尋ねなかった。

別の場所、水利当局のいかなる管轄からも離れたところで、エイドリアン・タイレルは二つ目の治具を通電せずに開かせていた。

担当する技師は、政府のどの登録簿にも名のない老女だった。世界は三度にわたり彼女の技能を引退させようとした。それでも彼女は、資料が輸出規制の対象となり、その後あまりに旧式で分類不能と

された機器を使い、個人として仕事を続けていた。名はイレーナ・フォス。タイレルにも省にも忠誠を誓っていない。彼女が忠実なのは、測定値が装置の示す意味を本当に持ちうるという可能性だけだった。

「起動する気はないのね」と彼女。

「ああ」

「起動できるかどうかさえ聞かない」

「これが何を証明するのか知りたい」

イレーナは絶縁プローブでセラミック製の開口部に触れた。「これは万能鍵として造られたものじゃない。適切なカードがあれば、旧式の MagicGate 交換を実行し、起動用データ群を保管済みの証明チェーンと照合する。それから結果に署名する。それだけ。回路の中に『魂』という語は存在しない」

「父はノートに同意という言葉を残している」

「あなたのお父様は、ノートにいろいろ書いたわ。その中には本当のこともあった」

エイドリアンは最後のページのスキャンを渡した。その語は繰り返し線で消されていたが、消去されてはいなかった。下には相容れない二つの命令がある。一つは完全初期化の前に、対象本人から新たな承認を得ることを求める。もう一つは差し迫った公共の脅威が宣言された場合、政府の保管責任者が本人に代われるとするものだった。どちらかを実行すれば、もう一方の正当性は破壊される。

「父はどちらを実装した？」

イレーナは治具基板の一部に走る配線を調べた。「決断する前に機械を造っていたのね。見て。二つの証明経路がある。一方は人の手で切断されている。半田付けは工場の仕事じゃない」

「復元できるか？」

「たぶん。でも回路を復元することと、誰にそれを使う権利があるかは別の話よ」

エイドリアンは、今では取り壊された食堂で父がレプリカントを労働問題への見事な解答と評した夜を思い出した。数年後、同じ人物が彼らを法的な負債と呼んだ別の会話も思い出した。どちらの記憶もノートを説明しなかった。老人は、なぜ考えを変えたのか知る尊厳を誰にも与えないまま立場を変えたのだ。

部屋で最も古い秘匿回線に私的な呼び出しが入った。発信元欄は空白だった。エイドリアンは背後に計器を映しながら応答したが、それらの制御ポートには電気が流れていなかった。

川村が現れた。徽章はなく、普通のスーツを着ていた。計算された省略だった。それで室長でなくなるわけではない。

「請願を受け取りましたね」と川村。

「届いた」

「例外的な技術価値を持つ未登録の人工生命に関するものです。あなたの遺産を保護できます」

「保管という意味だろう」

「合法的な管理責任の継続という意味です」

「その言葉はずいぶん伸縮自在になったな」

「政府の数少ない利点の一つです」

エイドリアンは沈黙した。川村は偶然に沈黙を埋めるような男ではない。

「公的統合計画が何を必要とするかはご存じでしょう」と室長は続けた。「六年の稼働期限、共通認証、再現可能な停止。二十五年稼働する産業用身体に、私的な指揮系統を蓄積させるわけにはいかない。議定書に署名する国家は、約束された失効を信頼できなければならないのです」

「それで、その生命の期限を迎える個人は？」

「『個人』という分類そのものが争点です」

「ならば証拠を殺して決着させるつもりか」

川村の表情は変わらなかった。「自律型の計画システムが実施する公開国民投票のようなものに発展させないつもりです」

エイドリアンは、その答えに恐怖より正確な何かを聞き取った。川村が資料を中央 AI から隠しているのは、解析能力が足りないからではない。ありすぎるからだ。統治の安定を最大化するよう委託されたアルゴリズムなら、人工生命の無期限の存続を効率と解釈するかもしれない。反対に、六年の義務的期限を除去可能な制約と解釈するかもしれない。どちらにせよ、問題は統制していると称する大臣たちの手を離れる。

「治具は渡さない」とエイドリアン。

「渡す必要はありません。あなたが技師ではなく相続人だと知っていますから」

エイドリアンはイレーナを見た。彼女は死んだ回路から目を離さない。侮辱は正確な位置に置かれていた。彼の保管責任には法的・倫理的な意味がある。しかし守る装置を操作する能力には限界があった。

「請願者に近づくなら」と川村。「無許可の初期化を行わないでください。その身体には未登録の構造が含まれる。省の管轄内で不具合を起こせば、結果の責任をあなたに負っていただきます」

「警告か？」

「まだ役に立つ、最後の礼儀です」

通話が切れた。イレーナは手で回線を抜いた。

「彼は計器を見ている」と彼女。

「私を監視しているんだ」

「違う。あなたを見ているなら、とっくに兵士を送っている。あなたから引き出せない答えを、誰が運んでくるか見ているのよ」

エイドリアンは請願書を見た。通常なら住所を記す欄に、差出人は問いを書き込んでいた。『第十一の身体の起動を、誰が承認したのか？』

その問いの方が、二つの装置より危険だ、と彼は思った。

潮門が開くころ、ロイとナディラは商業洗濯場の上階にある、窓のない部屋へ着いていた。蒸気は天井で凝縮し、洗濯機の私設貯水槽へ戻される。中には簡素な木綿の頭布を着けた若い女が座り、自分より古い計算機を操作していた。もう一つの椅子には男がいた。顔の半分は洗剤の蒸気から守るマスクに覆われていた。

二人とも立ち上がらなかった。

「相続人はあんたか」とロイ。

「いいえ」と女。「相続人は自分の居場所を明かすことに同意していません」

「ならば拒絶だな」

「面会が所有の試みに当たるかどうか、判断するための面接です」

ロイはナディラを見た。彼女は何も指示しなかった。

「奇妙な区別だ」

「ここで生き残るのは、奇妙な区別だけです」

女は三枚の紙を押し出した。旧省庁の書式は一枚もない。一枚目は本人の自発的出席の宣言。二枚目は、面会中の録音、遠隔起動、代替人格データの提示を禁じる文書。三枚目は、当事者が拒否するものを本人の言葉で記すための白紙だった。

「面会を成立させたいのか、それともできなくしたいのか」とロイ。

「失敗したときの指示だけが必要なのです」

「何も言わなかったら？」

「あなたを初期化しません」

その単純さが彼を動揺させた。目覚めて以来、出会った機関はみな技術的な必要を管轄権の根拠にしてきた。この機関は、まずその権限を放棄するところから始めた。誠実なのか、それとも異常に費用のかかる嘘を考案したのか。

「誰がそう聞けと言った？」

「保管者は、あなたが何を拒むか確認するよう求めました」

「何を許すかではなく？」

「許可なら作り出すのは簡単です」

ナディラは扉に寄りかかった。外では古い洗濯機のモーターが動いている。不均等な五回転と一度の休止。ロイはすでに建物の出口を把握していた。三つは力を使わずに通れる。四つ目は急激な動作が必要だが、その消費は現在の出力余力を超え、未知の液体に残された耐性の範囲には収まる。思考にロサンゼルスの屋上の記憶が絡みつこうとした。通りの上で宙づりになったデッカード。滑る指。頼まれもしないのに自分が救った命。ロイはそれを義務でも説明でもないとして退けた。

「遠隔制御は受け入れない」とロイ。

女は書き留めた。

「修復の条件としての記憶交換も拒否する。いまある記憶を検査のために明け渡すつもりもない」

また書いた。

「身体が損傷したら、救えるものを救えばいい。強制初期化はなしだ。政府による代理認証も認めない」

「ほかに方法がなかったら？」

ロイは考えた。目覚められなくなった身体は、彼が覚えている死と区別がつかないかもしれない。より優れた道具を持つ新しい主人に服従する方法を学ぶために、二つの都市を越えてきたわけではない。

「ならば、ほかに方法はない」

マスクの男がわずかに身じろぎした。一秒遅れてロイにも聞こえた。洗濯場の上空、どこかにある監視用ローターの圧力特性。次いで、普通のマイクなら電気雑音と判定するほど微弱なパルス。捜索ヘリではない。断続的に稼働する、壁越しの空間マッピング機。室内の容積を一室ずつ学習している。

ロイは女を見た。「この建物が測量されている」

「あとどれくらい？」

「三分も経たずに、ここに何人いるか識別する」

女の手は揺るがなかった。「あなたが出ていっても、拒否の意思は残ります」

「俺が残れば、あんたたちも連行される」

「私たちの選択を、あなたが管理する必要はありません」

一瞬、男の硬直した顔が、苛立ちに近い表情へ緩んだ。自分が要求したばかりの独立性を、同じように相手から示されたためだ。ナディラはほとんど微笑んだ。

そのとき灯りが消えた。

EMP ではなかった。圧力波は壁を打たず、バッテリー保護回路も作動していない。市の公共設備当局が洗濯場への認可給電を取り消しただけだった。私設設備は、自力で賄える負荷を引き受けた。階段の向こうから検査用ヒューマノイドの金属音がした。存在しないデジタル建物図を使わず、古い床を渡ろうとしている機械だった。

ロイはそれが一階の踊り場に達する前に動いた。戦うためではない。洗濯機へ行き、真鍮の排水留め具を外して数百リットルの熱い工程水を下の点検槽へ流した。蒸気が下層の廊下を満たす。降下中のヒューマノイドは停止し、床の許容荷重を再計算して、決して得られない安全認証を建物へ要求した。

「一時しのぎだ」とロイ。「三十秒ある」

彼らは乾燥ダクトを抜けた。熱で空気そのものが固体のようだった。ロイは誰も抱えて運ばなかった。ナディラが先を行き、二人の証人が後に続いた。機械は下に残った。銃弾よりも有効な安全論理に足止めされて。ロイの出力予備量はほとんど変わらず、流体損失も通常の基礎消耗の範囲に収まった。

だが屋上には二機目のドローンが待っていた。風に逆らって静止している。光学面には紋章がない。目に見える武器ではなく、コンパクトなセンサー群を搭載していた。機械はロイへ向き、狭域の局所フィールドで招待を送信した。

KAWAMURA / PRIVATE CONFERENCE.

ナディラに見えたのは装置の静止だけだった。「何を求めているの？」

「話がしたいらしい」

「応じる？」

会話によって自分の声、注意の配り方、機械が装う表情を瞳孔でどう追うか、そのどれほどの情報が漏れるのか、ロイは考えた。売店の紙片を思い出す。鏡はなし。

「その経路では話さない」

彼は屋上の排気口から噴き出す蒸気に踏み入った。白い噴流が一瞬ドローンの光学モデルを乱した。細い整備橋が隣の建物に通じ、そこから洪水用の暗渠へ下りる階段が伸びていた。英雄的な動作はない。破壊された機械の残骸もない。公共放送にふさわしい警報も。ドローンはその場に留まり、法的な入力欄のない拒絶を記録した。

岡京のヒューマノイド統括省地下にある密閉室で、川村はその拒絶を見ていた。分析官が三つの戦術案を提示している。いずれも対象本人、同行者、または洗濯場の証人の捕獲を含む。川村はすべて退けた。

「逃がしたのですね」と分析官。

「あることを実演させた」

「対象の回避パターンですか？」

「優先順位だ。私への直通回線を提示されたのに、インターフェースを信用できず断った。保管者が条件を保証できなければ、治具の使用も拒絶するだろう」

「では保管者を強制すべきです」

「いや。強制すれば、治具が所有の道具だと対象に教えることになる。自分の意思で近づかせる必要がある」

分析官は六年寿命法案の制限付き画面を開いた。共通規格を批准予定の国家一覧の下に、大臣室からの注記が点滅していた。中央 AI は一斉期限切れによる経済損失について質問していたが、回答はない。誰かがファイルに『モデル入力禁止』と記している。

「保管者が我々を拒絶した場合は？」

「我々を受け入れる必要はない。請願者を受け入れればいい」

川村は表示を閉じた。省そのものより古い別の端末には、レイチェルの研究資金記録の断片が表示されていた。研究所を持たない持株会社を経由して支払われた、雨水膜試験の請求書。同じ会社はかつて、タイレル施設からセラミック製開口部を輸送する費用を負担している。

数年を隔てた二つの事実。組み合わせれば道筋になる。しかしその道筋を追うには機械に追跡を頼まなければならず、彼にはまだそれができなかった。川村は文字が見慣れた配置を失うまで請求書を見つめた。

「自律相関処理は禁止だ」と分析官に言った。「私設モデルでもだ」

「承知しました」

川村はその保証を信用しなかった。ただ、分析官が理由を尋ねるのを恐れているという事実だけを信用した。

プドゥ・アルファの商業地区が礼拝時刻の表から貨物時刻の表へ切り替わるころ、新たな封筒がエイドリアン・タイレルに届いた。

治具の要求も、脅迫も、真相を明かすという約束もなかった。折られた紙には、証人が手書きで記録したロイの条件が記されていた。エイドリアンは停止した二つの装置のそばで読んだ。

遠隔制御は不可。強制記憶交換は不可。政府代理は不可。強制初期化は不可。

下余白には細い注記があった。『対象は過去の世代個体を、自身の私有財産として請求することを辞退した』

エイドリアンは長いあいだそれを見つめた。父は製造履歴のある物体には必ず所有者がいると信じていた。だがここには、先行する自分自身の各世代を所有することさえ拒む、製造された男がいる。

イレーナが戸口に来た。「会うの？」

「ああ」

「どこで？」

「ここでも治具のそばでもない。省が我々の避けるはずだと思う場所で」

「何を話すつもり？」

「私の知ることを。そして、あの装置には決して知りえないことを」

エイドリアンは紙を動かぬ機械のそばに置いた。数年ぶりに、二つの治具は一族の遺産ではなく、倫理的な答えを待つ技術上の問題に見えた。

彼は封印も機械可読パターンもない普通の紙に返事を書いた。

『保管者は請願者と面会する。証人一名の同席を認める。治具は別の場所に保管する。アクティベーションは行わない』

それから一行を付け加えた。

『来る前に技師へ尋ねてほしい。なぜ第十一世代の身体に、第七世代の接続ポートが残されているのか』

その夜遅くに返事を読んだとき、ロイを悩ませたのは問いそのものより、その前提だった。彼を一度も検査していない人物が、どの部品が世代を超えて残ったか知っている。接続部は交換工程の偶然ではない。残るよう意図されたのだ。

「ヴェイルのところへ戻れるわ」とナディラ。

「彼は自分が見たものを知っている。なぜ残されたかは知らない」

「なら、なぜ尋ねるの？」

「これを送った男が、俺がその違いを理解しているか試しているからだ」

ナディラは返事を折った。「少し嬉しそうね」

「そんなことはない」

しかし部屋の濡れたガラスに映る自分の顔を見て、ロイは深圳で目覚めたときと同じ険しい男を見た。皮膚の下に、他人が決めた未来を隠した男。彼には力を使うための身体と本能が与えられていた。いま、少なくとも二つの組織が、いつ目覚めるか決める権利を明け渡すよう誘っている。自分を雨の中から呼び戻した問いに答えるまでは、どちらにも応じるつもりはなかった。

誰が自分を造ったのか。そして、あとどれだけの時間を残したのか。

外では街の水が、幾千もの競合する主権のあいだを循環していた。市場の上では、すべての一滴が計上できると広告が約束している。市場の下、公衆コンピューターが届かない部屋では、古い機械が何年も見ていないカードを待っていた。

そのどちらにも、ロイがあとどれほど生きられるかは答えられなかった。